【資料2】大般涅槃経【遊行経】の組織

序説
- 通序
  - 信 ―― このように
  - 聞 ―― 私によって聞かれています（私は聞いています）
- 別序（般涅槃まで）
  - 時 ―― （感応相称の）一時
  - 教主 ― 世尊
  - 処 ―― 霊鷲山～クシナーラー
  - 同聞衆 ― 阿難ほか縁に応じての人々

大般涅槃経［遊行経］

正説

遊行前の法話

［最後の遊行に旅立つ］

内容	聞者	ところ
七不衰退法	阿難・禹舎大臣	霊鷲山
七（六）不衰退法	比丘ら	王舎城講堂
戒・定・慧の教		霊鷲山

最後の遊行における法話

内容	聞者	ところ
法の仕組みを知っている	舎利弗との問答	ナーランダ
破戒者の五過患と持戒者のご利益の教	優婆塞ら	パータリ村
智慧ある人はすでに渡り終わる	無問自説	恒河を渡る
四聖諦の教	比丘ら	コーティ村
法鏡と名づける法門の教示	阿難	ナーディカ煉瓦堂
正念・正知の教	比丘ら	アンバパーリ林
雨安居における病の時の思い	世尊の思い	竹林村
握拳は無い・無相心三昧・自燈明・法燈明の教	阿難	竹林村
世尊の言葉（遮婆羅廟は楽し・一劫以上存続の謎）	阿難	魔・阿難
般涅槃の告げと捨命住の数		チャーパーラ廟
地震出現の八因縁		
般涅槃の告げの後の阿難との問答	阿難	
壊法・捨命住寿　般涅槃の教		
法（八聖道ほか）の教と比丘等への般涅槃の告げ	比丘ら	大林の重閣講堂
ヴェサーリーにおける言葉	阿難	ヴェサーリー
四法（戒・定・慧・解脱）の教	比丘ら	バンダ村
四大法句の教示		
チュンダの供養食に中毒した時の言葉	チュンダ	アーナンダ廟
福貴の二帰依		パーヴァー
二時に如来の皮膚は輝やく	阿難	パーヴァー近く
チュンダの悔心を排除する言葉	阿難（チュンダ）	
真実の供養の教		
諸天についての言葉		
四つの信仰心を起すべき処	阿難	
茶毘・讃塔の遺教		
悲泣する阿難に向っての言葉		クシナーラー
比丘らに語る	比丘ら	
阿難の四希有法を比丘らに語る		
八聖道をスバッダに説く	スバッダ	（沙羅双樹の間）
スバッダの三帰依		
阿難に語ったさまざまな最後の言葉	阿難	
比丘らに最後の質問をうながす		
世尊の最後の言葉	比丘ら	

世尊の般涅槃の状態
世尊の般涅槃のときの諸偈と比丘らの言葉
世尊の茶毘
世尊の舎利の分配

流通説 ―― 略［かくてこのようなことがあった］

【資料3】如来・応供・等正覚者　釈尊

西暦	月	日	世寿	項目	内容	場所	原始経典
前四六八	四	八	一	生誕	釈迦族(Sakya)のゴータマ(Gotama)王家の太子として生まれる。名は悉達多(Siddhattha)。	藍毘尼(ルンビニ)	
					正覚していない菩薩(bodhisatta)であったとき「聖ならざる願望」があった。	伽毘羅衛(カピラヴィッツ)城	
			二九	出家	内心の奥深くからの「聖なる願望」にうながされて出家する。		
				修行	二人の師［アーラーラ・カーラーマ］の教えを受けたが満足しないで苦行を修する。それから苦行を捨てて五比丘と別れてスジャータの捧げる乳粥を食し、菩提樹下に座る。	前正覚山ウルベーラ	
	一二	八	三五	成道	〝無上正覚(anuttara samma-sambodhi)を覚証(abhisambuddha)して「聖なる願望」が成清されて、無上安穏涅槃」に到達した。そのとき「この法は深く微妙で見難く覚り難いので、愛欲の悦楽にとらわれている人には見えないであろうから、私を理解しなかったら人々には苦悩があるばかりになろう。そこで私の心は無関心に傾き法を説くことに傾かなかった」というまよいが生じた。	［菩提樹］仏陀伽耶(ブッダガヤ)	［聖求経］
				開覚	梵天の「世尊よ、法を説きたまえ」の勧請にうながされて、法を説く決意をして、まよいが断たれて、無上等正覚の自覚が明確になり、如来として立ち上がり法旅に出る。二人の師は世を去っていたので、五比丘に最初に法を説くべくバーラナシーに向かう。		
				覚の覚証	五比丘の処に向かう途中一旅行者のウパカに出遇う。その問いに偈で独白のように答える。「わたしは世間中の応供である。わたしは無上の教主である。わたしは一人の等正覚者である。寂静涅槃に到達している。冥闇の世間に不死の鼓を打たん」と、最初の等正覚者の名乗りは出るが、まだ如来と名乗っていない。また不死の言葉は出るが、寿〻は出ない。		
				説法の決意	最初の等正覚者の名乗り		
				最初の説法（初転法輪）	五比丘に「最初の説法」（初転法輪）をする。「阿難はいない」「比丘らよ、如来に向かって名を以て、あるいは友よの言葉を以て語りかけてはいけない。如来(tathāgata)・等正覚者は応供(arahan)の者である」と。最初の如来の名乗りが出る。		
				如来の名乗り			
				正覚の告げ四聖諦の教法	「私には四聖諦において、かくのごとく三転十二相に、如実成智見が明らかになったゆえに、いま私は一切の人々にむかって、私は無上等正覚をすでに覚証している〻と告げたのである。さらに智見が生じた、私に心の解脱は決定した。これは最後の生である。今や再び『有があると思うこと』はない〻」と。ここでもまだ〻寿〻の言葉は出ない。	［転法輪経］鹿野苑(ミッガダーヤ)	
				中・無明縁起の教法	「世間の集起を如実成に正慧もて見るひとには、世間において無がなくなる。世間の滅を如実成に正慧もて見るひとには、世間において有がなくなる。『一切のものが有る』というのは一つの極端（二辺）である。『一切のものは無い』というのは他の極端（第二辺）である。この両極端（二辺）を受けないで、中を以て如来は法を説く。無明を縁として諸行あり、諸行を縁として識あり、乃至このようにしてこの唯苦なる纏身の集起があり、しかし無明の余りなき離染の消滅より、諸行の滅あり、諸行の滅より識の滅あり、乃至このようにしてこの唯苦なる纏身の滅はおこる」と。	仏陀伽耶から鹿野苑へ向かう途中	
				法の談話と聖黙	「法の談話と聖黙」について語る。ついで「聖ならざる願望」と「聖なる願望」について語り、比丘らの心に聖願を喚起させて、その成満に導くために自分自身が若い日に内なる「聖なる願望」にうながされて出家し、ついにそれが成満ばらもんの草庵	祇園精舎ラマカ	「聖求経」
				誓願について	されて「私は無上安穏涅槃を希求してそれに到達した」と語り、更に「等正覚の如来」としてここに現存している自身の全体を述懐的・告白的に語る。		
			六〇頃	七不衰退法	七（六）不衰退法について語り、ついで正覚を語り、三学（戒・定・慧）を説き、慧を最上とし、慧において修せられた心は無明から全く解脱す」と語る。	王舎城霊鷲山	
				最後の遊行	「自燈明・法燈明・自帰依・法帰依」を語る。		
				捨命住寿	「阿難よ、実に今日、この今チャーパーラ廟において、正念正知の如来によって、寿の中の行の方面が捨された」「捨命住寿」（遊行経）（チュンダの供養食で病となる）	毘舎離(ヴェーサーリ)	「大般涅槃経」「遊行経」
				三帰依	「般涅槃にあたり釈尊自身の生誕・成道・転法輪・捨命住寿・般涅槃を思う」	チャーパーラ廟	
				茶毘讃塔	「世尊、この私は、世尊に帰依します。そして法と僧伽に帰依します」「福貴の二帰依（ブックサ）・須跋（スバッダ）」	クシナーラ	
				最後の言葉	「茶毘・讃塔の遺教」		
				般涅槃	「諸行は衰滅することを法としている。不放逸をもって完全に向かって歩めよ」		
			八〇	帝釈天の偈	無余依涅槃界に般涅槃する。般涅槃後茶毘に付し舎利は八分され瓶と灰の十の讃塔あり。		
前三八六					「実に諸行は無常である。生滅することを法としてもっている。生じおわって滅する。それら生滅の寂滅は安楽である。［諸行無常・是生滅法・生滅滅已・寂滅為楽］		